

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770064

研究課題名(和文) 宇宙飛行のテレビイメージ 1960年代のソ連における生中継プロパガンダ

研究課題名(英文) Televised Pictures of Human Space Flight: Live Broadcasting Propagand in the 1960s Soviet Union

研究代表者

亀田 真澄 (Kameda, Masumi)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・助教

研究者番号：70726679

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1960年代のソ連における有人宇宙飛行ミッションを「メディア・イベント」と捉え、そのテレビイメージの特性を、アメリカの有人宇宙飛行ミッションと比較しながら、明らかにしようとするものである。ソ連では宇宙船からの国際的なテレビ生中継がかなり早い段階から実施されていたが、それはなぜなのかという問いを出発点に、(1)生中継そのものに価値を置くプロパガンダが実施された背景及び議論過程の分析を通して、(2)ソ連の国家宣伝において宇宙船からの生中継が果たしていた役割を明確化するとともに、(3)それを「ライブ性の文化史」のなかに位置づけることを目指した。

研究成果の概要(英文)： The aim of this study is to investigate the representations of live images of Soviet cosmonauts of the early sixties, a period which saw the beginning of the “Soviet Cosmvision” propaganda.

During the Cold War, both the United States and the Soviet Union broadcasted a series of exciting television images via transnational networks. Of these media events, the most spectacular were undoubtedly the human spaceflight missions. Whereas the U.S. used mostly still images and photographs of American astronauts, the Soviet Union represented their cosmonauts chiefly through live image broadcasts from space. By comparison, the Soviet Union had begun actively propagating live images of cosmonauts in space as early as 1962, and these images were delivered to viewers across the world. This so-called Soviet “Cosmvision” propaganda campaign successfully demonstrated that the Space Race constituted a new form of state-sponsored entertainment.

研究分野：表象文化

キーワード：プロパガンダ 冷戦研究 ソ連文化

1. 研究開始当初の背景

本研究は、1960年代のソ連における有人宇宙飛行ミッションを「メディア・イベント」と捉え、そのテレビイメージの特性を、アメリカの有人宇宙飛行ミッションと比較しながら、明らかにしようとするものである。

【海外の研究動向】 2000年代後半以降、冷戦期の宇宙競争をメディア・イベントとして捉え直すアプローチへの関心が高まっている。特に、James Schwoch(2009)による国際政治としての冷戦期テレビネットワーク史、Michael Allen(2009)によるアメリカ有人宇宙飛行のテレビ放映史などにおいて、アメリカ宇宙開発計画のメディア政策としての側面に着目されてきた。さらに、共産主義文化研究の全般的な活性化を受け、ソ連・東欧圏のテレビ研究への機運も高まっている。Andrew Jenks(2012)や Lars Lundgren(2012) がガガーリン帰還記念パレードの国際的なテレビ放映状況について考察したほか、2012年には国際研究者グループ「(ポスト)社会主義圏のテレビ史研究ネットワーク」が設立され(申請者もメンバーとして参加)、ソ連の宇宙開発プロパガンダとテレビとの関係に取り組む研究は年々盛んになっている。ただしソ連は1962年というかなり早い段階で、宇宙船内からの映像を世界に向けて生中継していたにもかかわらず(下の年表参照)、そのテレビイメージ論についての体系的な研究はまだなされておらず、ソ連による宇宙飛行の生中継プロパガンダというテーマは未着手のままである。

【国内の研究動向】 「プロパガンダとしての宇宙開発」というテーマに関しては鈴木一人(2011)の研究が、またソ連の宇宙開発に関しては富田信之(2012)による概説的研究があるが、ソ連に限らず有人宇宙飛

行のテレビイメージに焦点を当てた体系的な研究はまだない。

2. 研究の目的

ソ連では宇宙船からの国際的なテレビ生中継がかなり早い段階から実施されていたが、それはなぜなのかという問いを出発点に、

(1) 生中継そのものに価値を置くプロパガンダが実施された背景及び議論過程の分析を通して、(2) ソ連の国家宣伝において宇宙船からの生中継が果たしていた役割を明確化するとともに、(3) それを「ライブ性の文化史」のなかに位置づけることを目指す。

3. 研究の方法

(1) メディア政策における議論の精査

本研究課題では、近年公開されたソ連宇宙開発関係の公文書を中心とする一次資料の体系的精査を通して、ソ連1960年代のメディア政策における意思決定プロセス、アメリカなど他国との影響関係、国際ラジオテレビ組織(OIRT)や欧州放送連合(EBU)との相互関係を検証した。

それによって、ソ連において生中継という「価値」がどのように認識され、文化政策において重視されるようになったかを総合的に明らかにし、「なぜアメリカより6年以上も前から、ソ連は宇宙船内からの生中継を実施していたのか?」という問いに、実証的に答えることを試みた。

(2) 「ライブ性の文化史」への位置づけ

上記を基盤として、メディア論における Philip Auslander(1999 他)や Steve Wurtzler(2009)の「ライブ性」概念史、Paul Virilio(1990)や Bernard Stigler(1994 他)によるリアルタイム産業論を積極的に援用することで、ソ連有人宇宙飛行の生中継が国内外に与えたプロパガンダ効果を検討するとともに、そのテレビイメージの特性を

「ライヴ性の文化史」の系譜に位置づけた。

(3) 具体的には、日本での資料精査に基づく検討のほかに、以下のように研究を進めた。

①アーカイヴ調査

モスクワにおいて、ロシア連邦国立アーカイヴ、ロシア国立科学技術アーカイヴ、ソ連共産党アーカイヴにおいて資料収集を行った。

②研究打ち合わせ・意見交換

アメリカにおいて、ロシアのテレビ技術発展・初期のテレビ文化についての研究者 Lars Lundgren 氏 (セーデルテルン大)、Christina Evans 氏 (イエール大) と研究打ち合わせを行ったほか、ロシア有人宇宙開発についての世界的な研究者である Andrew Jenks 氏 (カリフォルニア州立大) と面会し、意見交換を行った。

また、サンクト・ペテルブルクのテレビジョン研究所を訪問し、局長トゥイツーリン氏との研究打ち合わせを行った。

4. 研究成果

(1) ソ連が宇宙船からの国際的なテレビ生中継をかなり早い段階から実施していたこと背景について、ソ連においてはそもそも、テレビの生中継という性質がプロパガンダの目的において重要視されていたことが指摘できた。ソ連では、レーニンによる映画プロパガンダでも有名なように、もともと視聴覚メディアを用いたプロパガンダがさかんであり、特に1920年代以降は、ヴェルトフ、シクロフスキー、S. トレチャコフの議論にもあったように、「無媒介性」を重んじるドキュメンタリー運動が起こっていた。テレビ黎明期においても、ソ連政府は国民にテレビ購入をさかんに勧め、

プロパガンダ・メディアとしての有効性に早くから着目していたが、特に、ウラジーミル・サツパク等による当時の議論を参照すると、生中継であるという点にテレビの可能性を見ていたことがわかる。

(2) ソ連の国家宣伝において宇宙船からの生中継が果たしていた役割とは、ポスト・スターリン時代の新しい英雄を生むということであったことがわかった。アメリカで、ヴォストーク計画と同時進行していたマーキュリー計画と比較すると、ソ連の有人宇宙飛行は完璧なエンターテイメントとして計画されていた。これは、ミッションの危険性を思わせるような部分は一切排除して放映・報道するという姿勢にもあらわれている。ガガーリンをはじめとするソ連の宇宙飛行士たちは、スターリン時代の英雄とはまったく趣の違った、新しいタイプの英雄たちであり、ソヴィエト・コスモヴィジョン (有人宇宙飛行の様子を、その最中に地上へテレビ放映すること) はその新しい「カルト性」を広めるために重要な役割を果たしていた。フルシチョフのアメリカ訪問がアメリカにおいて生中継されていたことにも鑑みると、テレビ・フレンドリーなソ連というのが、ポスト・スターリン時代の新しいセルフ・イメージであったことがわかるが、宇宙飛行士たちはそのなかでもっとも影響力の強いシンボルであったと指摘できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①Masumi Kameda, "Yugoslav Reproductions of Heroes: Making

National Icons through Photography,”
*Балканские чтения 13 «Балканский
тезаурус: Начало»*, (M., Институт
славяноведения РАН, С.242-248) (査読
無し)

②亀田真澄「未来からの生中継—ヴォスト
ーク計画のテレビ・プロパガンダー」、『れ
にくさ』6号、東京大学大学院人文社会系
研究科、2005年、62-78頁(査読無し)

③亀田真澄「国家宣伝としてのリクリエー
ション—一九三〇年代ニューヨークとモス
クワの余暇文化」、『れにくさ』7号、東京
大学大学院人文社会系研究科、2006年、
97-113頁(査読無し)

[学会発表] (計 7 件)

①Masumi Kameda, “Nation-Building
Cult in Photography: Iconography of
Heroes in the Soviet Union and
Yugoslavia, Mar 17, 2015 (Filoloski
fakultet, The University of Beograd) (招
待有り)

③Masumi Kameda, “Soviet
Cosmovision: First Live Broadcasts from
Outer Space” ASEEES, 47th Annual
Convention, Philadelphia, Nov 19-22,
2015

③Masumi Kameda, “Live Images of
Cosmonauts: Soviet Television
Broadcasts of Spaceflights, 1961-1965”
The Ninth World Congress of ICCEES,
Makuhari, Aug 3-8, 2015 (千葉県千葉市
美浜区)

④Masumi Kameda, “Nation-Building
Cult in Photography: Iconography of

Heroes in Soviet Union and Yugoslavia”
Belgrade University, Belgrade, Serbia,
Mar 5, 2015 (招待有)

⑤Masumi Kameda, “Iconography with a
Single Face: Making National Icons in
the former Yugoslavia” The 13th
International Symposium on Balkan
Studies, The Russian Academy of Science,
Moscow, Russia, Apr 7-9, 2015

⑥Masumi Kameda, “Creating New
Lifestyle through Photography: Soviet
Influence on American Pictorial
Magazine Life” The 7th East Asian
Conference on Slavic-Eurasian Studies,
East China Normal University, Shanghai,
China, Sep 24-25, 2016

⑦Masumi Kameda, “Happiness
Propaganda: American and Soviet
Dream during the 1930s” Graduate
Institute of Russian Studies, NCCU,
Taipei, Taiwan, Nov 15, 2016 (招待有)

⑧Masumi Kameda, “Photo-essay and
Propaganda: *USSR in Construction*,
LIFE, and *FRONT*” National Chengchi
University, Taipei, Taiwan, Mar 9, 2017
(招待有)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

亀田 真澄 (KAMEDA, Masumi)

東京大学・人文社会系研究科・助教

研究者番号：70726679

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()